

龍南

校風改造の時機

◎熊本學生保護會議とか云ふものが、先達て縣廳の二階か何處かで開かれたそうだ。此報が一度傳ると赤練瓦の中で幾多の顔が赤くなつたり、青くなつたりした。そして種々な道聽途説は、校風の危機を説く者と、自己の危機を訴うる者との上に、更に種々な暗鬼を生せしめた。

◎然も暗鬼は唯暗鬼として、彼等の上に生せしめよ。前者の憤慨と、後者の恐怖との上に生ずる、諸種の暗鬼は、吾人にとつて全くの風馬牛である。吾人は唯過去に於ける我經驗と智識とを、現在の思索にまごめて、茲に吾人の赤裸々なる所感をのべる。

◎田中王堂氏は、其著「宮尊徳の新研究」の劈頭に於て「如何なる學說或は主張でも、一度其れが教權となつた上は、其價値の大部分は已に失はれたものと云つて好い。何故ならば、凡ての眞理は其れが絶

命を吟味せられ、改造せらるる事に依つてのみ其生命を持續する事が出来るのであるに、教權は此等の何れをも一切許さぬからである」と喝破して居る。

◎龍南に剛毅朴訥近仁矣の標旗が樹立せられて以來十幾年、其短かからぬ時代に於て龍南の土を踏んだ幾千の健兒は、此與へられたる標旗を如何に味ひ、如何に生活の上に現したであらうか。而して彼等は誠意を以て此教權に服し、若き喜悅と憧憬の心を以て、ひたすら之を生活化せんと努力したであらうか。

◎今更此過去に屬する事實に就いて、兎角の言をなすの必要を認めぬ。唯此等過ぎ去つた時代に於ては彼等が生活の統一と發展とに、此標旗が必要であつたから、當局者は單に此を捧げて以て彼等に與へ、彼等も又喜悅の心を以て之を享けたものと思ふ。

◎然し時代は推移した。日露戰爭と云ふ大階梯と共に時代思潮は驚く可き變化をなした事は今更、詳説する必要もあるまい。又時代思潮の變遷は社會生活の進化が生んだ當然の結果である事も、無論今更説く必要はあるまい。唯此進化し發展した社會の空氣

をくづつて來た新しき人々に對して、過去の時代に與へられた教權が、過去のまゝなる様式を以て、何處まで其權威を主張する事が出来るだらうか。

○是が與へられたる吾等の問題である。實驗と批判と自由との精神は、此新しき時代思潮が生んだ最も著しい傾向である。而して東西の歴史を通じて、常に此三つの精神に依つてのみ、過去が改造せられて新しき進化の過程が生ずる事は、否定す可からざる事實である。

○社會に於ける有ゆる教權は、個人をして實驗的に其を吟味し批評せしめずして、唯演繹的に其權威に服従を強ひんとする。是が新しき人々の前記三個の精神と相觸れて、激しく其反抗を受ける理由である。○龍南も亦社會の一部である。此處でも當然同じ事實が起らねばならぬ。自由と實驗と批判との精神に乏しかつた過去の人々は、與へられた教權に、其儘柔順に服従し、忠實に其を生活化する事が出来たかもしれないぬ。其時代に於ける龍南の平和は、到底吾々の想像する事が出来ない程であつたらう。

○然し新しき人々は、過去のまゝなる様式に於て

果して満足する事が出来るだらうか。此を改造し修正して、進化の過程に適合せしむる必要はなからうが、然も其一度教權として犯す事を禁せられ、演繹的に權威を強ひて、歸納的に探究を許されない以上、時と共に精神が去つて、徒らなる形骸のみが残されるのは、争はれない事實である。

○茲に於てか新しき人々の不満は生じる。彼等新しき人々は、精神なき形骸が、來つて其自由を囚へん事を拒んで、頻りに自己の解放を求める。實驗的批評的精神に立脚地を定めて、教權の眞價を歸納的に究めんと志す彼等は、従つて演繹的に其權威を強ひられん事を否定する。近年に於ける校風の混亂は此處に其源を發したのと惟ふ。

○校風を説く人は宜しく此處に其熟慮を回らさねばならぬ、無論有ゆる思想も主張も其生れた時には、各自のゼテレーシジョンの改造を志し救護を企圖して説き廣められたもので、又彼等先覺者の取つた様式は、其に最も適合したもので有つた。

○然し過去は過去である。過去に生れたものの内容に何等の修正を加へず、其様式に何等の改造を試み

ずして、直に取つて是を新しき時代に強ひんとするは、餘りに進化を無視した行爲と云はねばならぬ。況んや其が残された空しき形骸のみで有つた場合、新しき人々は果して、其を甘受し得るだらうか。○無論吾人と雖も、有ゆる進化は過去の改造に依つてのみ、初めて得可き物なる事を確信する点に於て最忠實なる保守主義者である。然し實驗的批判的精神に依つて、殘された空しき形骸の内容を吟味し、斯くて其無意義なる束縛から自己の解放を求むる、彼等新しき人々に對して、吾人は衷心より同感の胸を抱いて、全し途を歩まざるを得ない。即是が最も根蒂ある進化の階梯と信するからである。

◎然も彼等新しき人々の負うた運命は、頗る薄倖であつた。彼等の或者は徒らなる急進の志に驅られて過去を捨てたが、過去を離れて何物をも創造するの力がなかつた。又或者は頻りに過去の改造を企てたが、折角合理的な努力も教權の壓迫と同伴者の減少の爲めに、自己を除いては大した効果を生じなかつた。斯くて校風は愈々亂れて遂に其歸趣を失つたのである。

◎此間隙に乗じて現れたのは、自由の名に隠れて放縱と逸樂を貪る一派であつた。彼等の頭腦には何等新しい所がない。其智識は淺薄で主觀は貧弱淺少である。彼等は私かに最守舊派の人々を偽善者と呼び、眞面目なる改革者を目して卑怯と云ふ。然も彼等は過渡期の名に依つて其惡行を覆ひ、其罪を社會に歸せんとする点に於て、最偽善であり、最卑怯である。又彼等に限つて、猛然表面に立つて反抗する丈の勇氣はない。

◎彼等は土鼠の如く光を怖れ、蛇の如く猜疑の心に富み。如月の猫の如くに啼くのである。彼等は自ら新しき社會に育つたと誇りながら其頭には微毒が生じて居る。彼等のディレッツタンテイズムには何等近代的な悲壯な色彩もなければ、根蒂もない。唯々彼等は、心私かに、紙治や伊左工門を以て自任して居る時代遅れに過ぎぬ。

◎然し彼等の感化力は偉大なものが有る。今や怖る可き根蒂は龍南の土深く根ざされた。是を見るや、時機到れりと言はぬ許りに頭の悪い連中は、皆吾遅れじと争つて、各自の川庄を求め、吉田屋を求め、

斯くて彼等の三ヶ年は無意義に空費され其同意と後進とに、怖る可き害毒を注ぎ懸ける。

◎否彼等一派の中には、吾知らず忠兵衛となつて、越後屋の階下に封印を切り兼ねまじき連中も居る。

最怖る可きは是等頭の古くて惡るい連中である。彼等は自己の盲目を忘れ、無智を忘れ、却つて頻りに其周圍を呪ふ、過去の教權に服する從順の心も無ければ、更に新しき改造を企つる意氣をも欠く。斯くても、尙彼等は其自らを理解し得ないのである。

◎此徒は吾人の敢て捨つるを惜しむ必要を認めぬ。否彼等が吾人を捨つるに先立つて、既に吾人は彼等を捨てた。吾人は唯隱逃を願はず進んで其周圍の改造を企てんとする人々に、吾人と同じ途を踏まん事を切望する。

◎然らば吾人が踏む可き途とは何であるか。即ち殘された教權の形骸を捨て、過去と現在とを綜合し、其中より新に意義あるものを抽出し來つて、絶えず是に改造を加へつゝ以て將來に處せんとするにある。◎道徳は永久變らざる固定の意義をもつものではない。努力に伴ふ進化と、進化に伴ふ新しき理想とに

依つて、絶えず改造され行く處に、常に澄澗たる精氣は存する、ニイチエ曰く「道徳的なる現象あるなし。唯現象に對して道徳的の解釋あるのみ」と。吾人の解釋をして、常に意義あるものたらしめんには、吾人は常に新しき地に立つて、新しき眼を以て見ねばならぬ。

◎吾人が永く與へられた、此古き標旗を捨てる可き時は來た。標旗は標旗其自身に價値が有るのではない。吾人が其を如何に解するかに依りて初めて。唯價値が生ずる。吾人の解釋が、過去のゼネレーションの其と異つた以上、もはや吾人に對して、標旗は存在の意義を失つた。

◎あゝ誰れか立つて吾人に新しき標旗を與ふる者を當局者か、否。先輩か。否、唯是實に吾人自身に外ならぬ。吾人自ら吾人の途を開く、是が殘された唯一の途で、然も最苦しき又最もうれしき途で有る、斯くて新に樹立せられた標旗が、新しき解釋を與へられる時、吾人の有ゆる行爲は、茲に初めて澄澗たる意義を生ずるのである。

◎是は單なる龍南の一小事件ではない。廣く解すれば

ば。社會上の問題である、新しき道德に對する蒼生の要求日に急にして、尙新しき一物をも與へ得ざる現代に於て、吾等青年に托されたる一大事業ではないか。斯くて新に生み得たる吾等の道德が、更に校門の外を照して、絶えず社會を改造し、又社會の進化に依つて道德其自身が絶えず改造さるゝ時、此時始めて新社會と新道德との融和の中に、意義ある新文化の花は咲くのではないか。

◎吾人は、若き憧憬の心を以て、切に其時の來るをまつ。

(渙生)

梅花三四

◎梅花、三四、点々と東籬を綴つて、又新しく春が來た。夢見る如き風に誘はれて、そごろなる小袖心地の、身も魂も香りに搖らぐ春が來た。岸には櫻の蕾がふくらみ、水の底では鯉の子が育つ幾夜の淡き暖かさを、地上に渦巻く朧ろの夜氣に包まれて、人の子の命の枝には、又新しき生活の若芽が萌ゆる。◎げに地上には又新しく春が來た。然も翻つて龍南を見る。何處に新しき春の姿が現れたか。教權に壓

し付けられた龍南の思潮界は、ニイテマの所謂「輕跳なる末人」の蠢動を包んで、悲しいかな何處にも若々しい下蕪のの色は見ぬ。斯くても彼等の平和は續くのである。

◎ツアラトストラ、其の住みし森に近き市に行き、市場に群る人々に説いて曰く、「汝等は蟲より人間に進みき。然も汝等の中なる多くは尙蟲なり。曾つて汝等は猿猴なりき。今も尙ほ人間は、如何なる猿猴よりも更に猿猴なり。然り。余は龍南に猿猴と蟲との餘り多きに苦しむ者である。」

◎蟲と猿猴との世界に、思想の進化と發展を求むるのは、求むる方が誤りかも知れぬ。然し進化は地上の定則である。彼等蟲も猿猴も、何時かは進化して人間となる可き時が來ねばならぬ。然も此進化を妨ぐるものは、第一に不見識なる彼の上級生である。◎少數を除いた他の上級生は、皆此進化の敵である。彼等自ら自己を侮辱して、猿猴となりながら、後に來る人々には自らが捨てた教權の形骸を強ひんとする。否現時では教權の影をすら與へずして、却つて是を猿猴の仲間に入れれる。

◎見よ！新たに來た人々に、有ゆる熊本の暗黒を教へるのには彼等である。教へない迄も、少くとも、暗黒に入る可き第一の鍵を與へ、暗示を與へるのは彼等である。是等猿猴を以て満足し、蟲となつて歡ぶ、不見識なる上級生を倒すに非ずんば、龍南の思想界に永遠春は來ない。

◎五高に縣閥、藩閥、校閥を作るものは又彼等である。彼等あはれなる末人は、多數の力を併せずんば何事も樹立する事が出來ないのである。彼等末人が愛郷心、愛校心の名の下に、群をなして歩まねばならないのは、取りもなをさず彼等個々の力の餘りに小弱である証明ではないか。自己を餘りに侮辱する行爲ではないか。

◎然も彼等は得意である。頻りに數の多きを誇つて群集の力を、自己一人の力の如く考へて居る。彼等は彼等各自の陋劣なる野心を満足させんが爲め、龍南の政權にあり附かんが爲めに、相互に群集の力を利用する。斯くて愛校心なる美しき名の下に幾多陋劣なる行爲は演せられ、是に依つて幾度か龍南の進歩は阻止された、斯くて尚彼等を許す可きか。

◎説をなす者曰く、「愛親覺羅氏の社稷を亡したものは、革命黨に非ずして、寧ろ宮中の光を閉じた宦官である。先に西太后を誤つた者は李蓮英で今度隆祐皇太后を誤つた者は、同じく宦官張徳である」と。龍南の末人中に、果して一人の宦官も居ないだらうかバラチフス事件の時にも其他の時にも、果して宦官は現れなかつたらうか。

◎陽に剛健を叫びながら、陰に暮夜犬の如く裏門をくゞる彼等宦官は、實に龍南進化の敵である。聰明なる當局者の眼を覆うて隨所に事を誤らせる者は、彼等宦官である。犬となつて満足する者は、げに猿猴よりも更に下等なる動物である。

◎龍南に多數を占むる、是等哀れむ可き猿猴の中に、更に「自己推選」なる滑稽な現象が有る。是等「自己推選」をやる猿猴の手に依りて、神聖なる可き龍南會委員や、學寮役員の改選や發火演習の幹部の選定は幾度か汚され、又今も汚されつゝある。

◎「委員なんて忙しいものは嫌やだな」「何々隊長なんて骨の折れる役は御免だ」等と、暗にはのめかすのは、未だく可愛らしい所がある。巧みに然も厚顏

に「自己推選」を行ふに到つては、まことに沙汰の限
 りである。其が驚くまい事が、何々隊長、何々官の
 腕章が、イロハと肉を交換され、何々部委員なる名
 詞が、玉盃の縁酒に依つて購はる。と云ふ説を聞く
 に到つては、實に吾人の想像だも及ばざる所である。
 斯くて猿猴の唇に誇りの笑ひが漂ふそうだ。

◎然も翻つて思ふ。斯る猿猴を生んだ者は、彼等猿
 猴のオヤヂである。龍南に蠢動する猿猴の罪の少く
 とも三分の一は、誰が負ふ可きものだらうか。余は
 信ずる。現今日本に存在せる無数のオヤヂを大別す
 れば、約次の如き二種の様式に分れる。一つは息子
 を借家乃至は株券と間違へて居るオヤヂである。他
 は子供を自己の裝飾品と心得て居るオヤヂである。

◎前者に屬するオヤヂは、頻りに息子が卒業後の收
 入を數へ、其少しでも大からん事を希ふ。後者に屬
 するオヤヂは、小供が學士になる可きを其郷黨に誇
 り、やがては博士たる可きを振れ巡る。斯くて此二
 種のオヤヂは、學校とは息子が、主觀の充實を計り、
 人格の發展を計る可き處なる事を忘却して居る。是
 が猿猴を生んだ大なる一原因である。茲に到つてそ

ろに、オヤヂ亡國論を叫ばざるを得ないと共に、斯
 種のオヤヂを持たぬ人々の幸福を祝する。

◎そんな横途にそれた。余は又龍南の時事に歸らね
 ばならぬ。學生保護會議と云ふから、金でも呉れる
 のかと思つたら、何だ後から角燈とサイベルが附く
 のか」と云つた人が有つた。是は無論其人の誤解で
 ある。然し龍南の近き過去に於て、此嘲笑を發せし
 むる新なる現象が起つたのを、否定する事は出來ま
 い。

◎「保護會議」の遙か以前に、「保護會議」の主意と正
 反對な忌む可き現象が、龍南の裡に起つたのは事實
 である。げに今でも多數のサイベルは、得意の色を
 満面に浮べて、角燈の光の下に頻りと大型の名刺を
 振り廻すそうだ。

◎誰の名刺か其は知らぬ。又其が事實か否かも知ら
 ぬ、唯古き思想の上に立つて、新しき物に、ひたす
 ら抑壓の手を下さんとする人々は、宜しくメツテル
 ニツヒ失脚の歴史を省みるが好い。メツテルニツヒ
 さへも斯くの如き末路に泣いた。況んやメツテルニ
 ツヒに遙かに遠き人々に於てをやだ。

◎動あれば反動あり。十の力が加へられれば、必ず十の反撥がある。加へらるゝ力が多ければ多い程、必ず其反撥も強くなる。團體の進化は、團體其自身の手によつて開拓せらる可きものである、若し其團體の頭腦が幼稚な場合は、開拓された跡に對し、新しき頭腦に依つて是非の批判を下し、更に是を最善の方向に向はしむるのが爲政者の貴き所以ではなからうか。

◎其が生じた根本の起因を究めずして、新しき傾向に、徒らなる抑壓の手を下し、其を以前の位置に還へさんとするのは、餘りに進化の定則を無視した行爲と言はねばならぬ。唯是を誘導して最善の途に入らしむるのが。最光輝ある行爲と信ずる。

◎吾人は道聽途説がもたらす、所謂角燈下の名刺を信する者ではない、現在に於ても其を信じないが、又將來に於ても信するやうな時の來ない事を切望する。唯斯る忌む可き流言非語が流布せらるゝ事丈けでも、大に怖る可き現象と思ふ。

◎今時計が更け行く春寒の室に十二時を打つた。時と共に吾人の筆も亦進む。思ふ。自炊制度の廢止は今

日より急なる時はない。今迄幾度か改革の聲起り、廢止の叫の發せられながら、尙以て廢止の斷行を見ないのは、遂に其理由を知るに苦しまざるを得ない。◎歴史の名の下に、隠れ、ば、古き物は、如何に悪しくとも皆保存せられねばならぬと云ふ理由はない。余が入學の當時、炊事委員長室と、雜誌部委員室とは、學寮の二大伏魔殿であるとの定評が有つた、其後の雜誌部は二代前から改革せられて、漸く其忌む可き名を逃れた。然し炊事委員長室の其後は果して如何だらうか。

◎入り手の無い事に於て、雜誌部は今や新しく幽靈屋敷との名を得た。然し自己推選の多い事に於て、炊事委員長室は依然たる伏魔殿である。前門に醜劣限りなき商人が立ち、後門には老獺極りなき立山が控へてゐる、此伏魔殿に入つて奈落に落ちざる者は果して何人あるか。

◎或時は真相の發覺を怖れて、帳簿を火中に投じた時代も有つた。「三助病氣炊事委員長精養軒」と云ふ川柳(一)に、果して出所が無いと云へるか。近き過去に於ては、一つの醜聞も耳にせぬ。然し遠き過去

より重なつな幾多の怖る可き歴史を省みれば、單に近代の小康を以て、直に將來の保證とする事は出來ぬ。

◎凡そ斯る制度は、理想的人を得て後始めて行はる可きものである。人に乏しい時又は人を誤り選した時には、三百の寮生は黙して其醜劣に眼を閉づ可きものだらうか。歴史とは絶對に重せねばならぬ物ではない。絶えず改造せられてこそ、歴史の眞價は高貴なる光を放つ。

◎或人は云ふ、「自炊制度は官立學校の中で、日本中唯五高丈けである。故に是を擁護せねばならぬ」と。然し日本に唯一なものが必ずしも高貴な價値ある物とは云へぬ。自炊制度の日本で唯一なるが如く、娛樂室の菓子も、小なる事日本で唯一である。周圍の事物が進化すれば進化する程、娛樂室の菓子は退化する、知らず、是何の罪か。

◎自炊制度を廢止する事は、實に今日の急務である。是は外でも無い。近時珍らしく暫時續いた美しい歴史を最後として、茲に其幕を切つて落す事である。蛆がわき出してから騒いでも既に遅い。蛆が湧くに先

立つて、湧く怖れの有る物を根底より除くに限る。是が先覺者の態度と思ふ。

◎龍南の年中行事の中で、最も愚劣な物は彼の擬國會である、一体あれは何の眞似だ。あれは果して何の見地に立つて、何を目的とするのか。是も要するに猿猴共の奇怪なる喜劇に過ぎぬ。夕立に逢つた五月人形のやうな連中が、いや高き邊に鎮座遊ばして、白布を懸けた机を前に控へた圖は、如何見ても一代の珍である。

◎更に自稱代議士諸君は、新聞の切抜きを俄に頭に詰め込んで、其を淺薄な智識でこね上げた奴を「諸君」の聲と共に臆面も無く晒け出すんだから、堪まらない。大概度胸の好い男でも、後の夢見が怖しくつて中途で逃げ出すのは無理もない。斯る愚劣な物は今後斷して止して欲しい。

◎上洛軍は凱歌と共に、多大の光榮を擔うて歸校した。吾人は滿腔の熱誠を以て戰士の勞を多とする。然し光榮の道は臺に導く。希くば不屈な勇氣を更に不屈ならしめて、此光榮をして永遠に續く光榮ならしめよ。

更に將來に於て、より以上の光榮あらしめよ。

◎あゝ春が來た。欄頭の花影靡ろの夜氣に濡れて、紫煙ほのかに東籬を包む時、金爐に残る香を聞きつゝ、又新しき人生の途を思ひ度い。(渙生)

田園將に蕪せむこそす

仰けば大天寥廓として星羅萬億を列ね、俯すれば黃地茫茫として山川無數を載す。嗚呼乾坤何をか囁く。

私が劈頭に當局者の注意を促し、他面龍南健兒が抱く公平にして、卒直なる輿論に訴へたいものは、テニスコートの擴張問題である。私はこの問題を論述するには、極く私心なき態度を根柢として居ることを承知して貰いたい。今更斯く論じても何等新しい權威を感ずるといふ譯でもないが。由來校友會の名目の下に於て、出來るだけの運動種類を網羅し、その維持及發展に關し、吾人が寒い懷から多額の阿堵物を醸出する所以は、要するに身体發達の健實を期するに外ならぬ。焉んぞ知らむ。果して實現に幾分かの影を投じて居るか。ごうか。

私はテニスの選手のみならず。其の他あらゆる選手諸君には萬腔の尊敬と同情を捧ぐるに躊躇せぬ一人である。然りと雖もテニス部はたゞ選手諸君のためのみ設置してあるものなるか。さもなければ九百の生徒を立脚して創設したのか。この問題を氷解するには應門三尺の童子の智識を以てしても、多き過ぐる位なシングルにして明白なことである。若し選手諸君練技の目的以外に期待する所がないとすれば私は最早や何物をも言ふことを欲せない。然し私は如上の目的は全く誤謬だと論定し、後者の意義を以て合理的前提なりと確信し、論を運ぶことにする。現今我が校に於て、使用し得べきテニスコートは、悲しむべし唯一個である。選手諸君十五六人専有を目的とせば、十分かも知れむ。これ正當と假定した前提とは全然相違してゐる。即ち正しい斷案とは言へまい。運動の効力は自ら手を下すことである。見で居て筋肉が大夫になり、身体が偉大となるものならば、誰あつて額に汗を流す馬鹿者がよし廣い世界とは謂へ存しはしまい。九百人に對して一つのコート實に妙な事實ではあるまいか。

田舎の中學にすら二つか三つ位のポトは有る。私は極端な擴張論者では決してない大勢を遠觀してこれに適合せる所置を爲し得る力を持つてゐる。擴張すれば經費に不足を生ずると反對するは前知し得ることである。私は例年の豫算を觀てた一つのポトに使用するにあれ位の金額が費消さるゝかと疑ふたことが度々ある。若し擴張すれば豫算にマイナスを引き起すならば、豫備金からでも支出して万々差支へはあるまい。豫備金は一旦緩急の場合を目あてとするのであつて、必要生じた曉に於ていさへ筐底深く藏するは能ではあるまい。時來りぬ、豫備金は尙默せしむべきか。再言す。尙藏すべきか。

先輩に聞くに昔は四つ位は存在して居たぞ。然るに今となつて一つに減せしは何故であらうか。當局者がテニスの必要を認ないのか。さもなくばテニス部を緊縮せしめて以てその金額を他に轉用したのか。私の觀察した範圍内に於ては外に新設されたものや大いに擴張された事業はないらしい。愈疑惑の迷霧を彷徨してゐる。一日も早く解決の光に接したい心持がする。

或は遠征費に使途する故に、擴張は不可能だと主張する者があらうし。然り最もである。成程遠征には非常に多額の金錢を要するは事實である。これを楯として反駁する者こそ憫然たる者である。私はあらゆる龍南會雜誌を通覽したが、昔も遠征はして居る。勿論七高と交換的遠征たりしことは知つた京都は鹿兒島より遠い、従つて費用を要することは自明だが、遠征するため、九百の生徒の運動器具を萎縮することは、少し本末顛倒ではあるまいか。當局者の御一考を促したい。然し私は遠征に反對する論者ではない。否寧ろ私の持論より見て遠征せざるを以て不快に思ふ次第である。序に附加するが校風の健實なる發達は、内固より各人の覺悟を必要とするが井中の蛙は終世井中の蛙である。沈滞して腐敗するは水のみではない。校風の進歩はどうしても對校にかざる。やるべし。大いに勵行すべし對校競技。

或は運動のため、勉勵を閑却するならむといふ想像を持つて居るものもあらう。淺見驚くべし。若しかくの如き意見を有するものあらば、休息は活動に是非必要である。適當な運動もせず、一室に閉ぢこも

つて居て、つまらぬ妄想を画く方を是とするものならば致方ないが。苟も論語を讀むだ人ならば、斯くの如き謬見を抱く者はあるまい。万一誤つて存するならば、須らく社會的自殺を強ふ可しである。

現代の教育は、餘りに智的方面に重きを置き過ぎはせないだらうか。社會の叫びはどうか。長夜の夢醒めて体育論を云々する者漸く増加の傾向を示した。覺醒するの遅きは、覺醒せざるよりも幾分取る可き点があるが、社會の木鐸として自らを認め、先覺者として人も許す者にして、昨今になつて、やれ体育會とか、何とかの會を組織して、体育の國防上並に文化の發展上看過すべからざるを力説するに至つた。命あつての物種とはよく眞意を道破した明言だと思ふ。

私の極く古い記憶から「健全なる精神は健全なる身に宿る」といふ一句が浮び出でた。然るに日本人はこの意を解し兼ねると見へる。天才多病とか言つて葦の様な瘦身を提げ、白壁の汚れたとしか信せられぬ顔色を有してゐるのが、反つて學に厚い者と誤信して居る。澆季と謂はむか、何と稱せむか私に

は一寸適當の命辭が起らぬ。青年に取つて最も注意すべきは無聊に苦しむと云ふ点にある。小人閑居して不善をなす」然り最もである。この濁流を滅絶せしめて、出来るだけ奮闘心を惹起せしむべき方法を思念するは、勿論我々相互の思慮、處作を前提とするも、一方當局者がこの前提より誘出した斷案を希望せねばならむ。この斷案を私の眼に映せしめば、目下の我が運動界に於ては、テニスコートの擴張ではあるまいか。

たゞり落つ血潮を満足せしむるに散歩は果して慾求を充實せしめ得るだけの價値あるものであらうか。固より天然と囁き、自然に接することは、精神の汚点を純潔にし、疲憊せる肉体に汚泉を與ゆる点から思考するに必要には相違ない。然し乍ら「青年と散歩」この對照は十分にして内充せるコントラストであらうか。前段述べた散歩の目的に生命あらしむるには山光水色の美なる所を選択せすばなるまい。立田山可ならむ。畫津の水大いに意を得たり。これ抽象的の觀念であつて、實際果して之れらを利用するものが澤山あるか、甚だ疑はざるを得ぬ私は抽象的

價值よりも出來得べくむば、具體的の價值、實際上に價值を認むることを欲し、且つ認むることに努力して居る。

私は無茶に主張するものではない。大に依る所があるからである。經費が豊富でも、地面が無いか、若くは地面があつて、經費が欠乏するならば、私は何も謂はないが。私の研究と言へば誇張の様だが、具體的に考へたことによると、地面も多くあり、經費にしても一つか二つ位擴張するには、今少し經濟的に使用したら有ると信ずる。雑草の生ふるまゝに土地を放任する位不經濟なことはあるまい。殊に緊縮的我が國財力から打算すると痛感せざるを得ないかく言へば「猫額程の土地以て爲すあるなし」と抗する者があるかも知れむ。尤もな議論であるが、一萬圓も一厘の蓄積の結果たることを承知して貰いたい。勿論私一個の揣摩であるが、テニス是我が武士道の精神と矛盾してゐると思ふ頑固な人もなきにしもあらずだ。私はこの妙な關係を思いついた時には實際噴飯したが折角乗り出した舟だから、少し漕いで見やうが、白狀する、私には詳論するの勇氣はな

い。餘りに奇想だから。まだ封建時代の帽子を冠つて居る人には、すべて運動といふものは面とか小手とか竹刀を持つてやらねば、運動ではないかと考へて居る者も、間々見受け、又時々御高説を拜聽するそれだから青年と意見が衝突するので、ために兩者の運轉が圓滑に行かぬ。日本在來の運動大いに可である。然し多くの場合室内的はた家屋内の運動であることは、少し欠点ではあるまいか。之れに反してテニス其の他のものは、大概家屋外のもので、非常に精神が爽快になる。それ故に西洋の運動と日本の在來の運動とを車の兩輪といふ格に置いて、身體を練磨したら、理想的ではあるまいか。これ以上論じはせぬ。謂ふ程野暮である。

以上の立論は公平なものと思ふ。若し所説中誤つや点があるなら喜むで御訂正を希望致します。或はそれを基礎として又論ずる機會もあらうと確信する。

尤後に私の教育觀の趣旨を、極く簡單に開陳して結論に代へませう。教育の目的は、精神と肉體との權衡を保全して、其の整一なる發達を企圖すること

である。精神は肉体の内に在りて、單一なるものに似たれども、其の實肉体と離る可からざるの關係を有し、一種の有機体の如く統一をしたものである。近頃薄志弱行の青年が簇出する原因は、蓋し青年の体力が非常に減少したことにある。故に統一を失ふときは、精神の活動紊亂してまた收拾すべからざる奈落の底に投ずるに至る。教育者は敢て積極主義にのみ、目を向くるの必要はあるまい。消極主義も是非熟思すべきである。要するに積極と消極との併用。約言すれば兩者勢力の中斜的方面こそ理想的教育主義ではあるまいか。(精生)

短艇の存立奈何

◎微温の東風一過して「陽春」てふ感逼る事頻也、渡鹿の練兵場を一團の吾が健兒、白きシートを肩にして、繪津に向つて驅け足にて行くを見れば、四月の初めに舉行せらるゝ、吾が短艇競漕の壯觀を思はずんば非ざる也。成程傍觀の地位に立つては彼の一日は實に愉快に外ならざるも、更に一步を進めて其内狀を窺へば同情に値する事實無きに非ず。

◎固より選手は或る意味に於て犧牲也。強健なる鐵腕家は選ばれて各部を代表し、殆んど此第二學期の土曜日曜は勿論平日の午後と雖も里餘の繪津に例の驅け足を爲す、繪津の水を騒き廻して日暮れて歸宿す、夜は勞れて睡眠を催し、翌朝は豫習せず出席して獨乙語の先生よりた目玉といふ鹽梅(皆とはいはず、又之あるやを保証せず)。冬休みは遠航にて、春休みは最後の練習にて樂しき家庭にも歸らずして湖畔の無味淡々たる生活を爲す。選手自身は面白き事かと思へば豈計らんや「苦しい、つらい」と顔を蹙むるにあらずや。

◎夫れ何事にまれ、安閑として其間にある利益快樂を得んと思ふは、初めより不了見なる勝手の希望にして、實際得可らざるは勿論なれば、其「苦しい、つらい」といふ事がやがて身心の練磨修養に効あるべきものならんも、吾人は吾が龍南會の短艇が、かゝる一部分の人々の短艇として存立せるの有様を觀する時、餘りに一般的ならざるを悲しまずんば非ざる也。

◎選手其物が専有せりと難するに非ざる也、吾々が

餘りに選手に責任を負はし、附與し過ぎたりといふにあり。見よ平常選手以外の一團湖上の半日を樂しみ、一日の川尻航を爲す者ありと雖も、其大部は選手之苦吟に用ゐられ、彼の四月の大競漕會の一日を見るに、一般の競漕者は單に一個のメダルを目的とするにあるのみにして、對部選手競漕のための如き觀無くんば非ざる也。

◎更に痛ましきは選手競漕の結果也。競漕たる以上何れか勝ち、何れか負くるは理の當然、從つて勝ちたるものは鐘鼓打鳴らして凱歌をあげて相喜び。負けたる者は面を伏し流涕相擁して泣く。あゝ勝つて凱歌を三唱する時には選手ならざる者も欣躍して狂し。負けて合宿に選手に對する時には、吾人は心身殆んど爲すところを知らず、況んや半歳以上の時日を犠牲にして苦闘を續けたる者をや。

◎吾人は戰勝の快と勝敗の悲とは常則にして人類の社會には皆之れおらざる無しとして暫く之を論難せず、寧ろ勝つて躍り、負けて泣くを男子の快とすも、之がため對部の觀念著しく區劃を明にして、其間障壁の堆堤を生ずるが如き行懸りを目睹して歎

せずんば非ざる也。吾人は即此現象を事實に認めて龍南一國のために長大息せし事幾度ぞ、己が部のためには龍南一國の運命を省みずといふ不了見を拘く者無きにはあらざりし也。兄弟牆に閱げども外其侮を禦がずんば、家に在て一家を奈何せん、國に在て一國を奈何せん、校にあつて一校を奈何せん。

◎僅々數分間の勝負の結果が對部の選手と選手との間を猿犬も雷ならざる仲となし、甚しきに至つては人身、個入の攻撃となり思はぬ奇觀を見る事あり、斯る事は實に選手の人格の高下を評價す可きものにして、男子の潔しとするところに非ず、吾人は寧ろ天空快濶の海に其氣を養ひ、清蒼茫々の水に其胸を洗ひたる男子の爲すべく、あまりに愚痴たるを疑はずんば非ざる也。只吾人の欲する處は、勝つたるものは自己を祝すべく、負けたる者は敵の勝を賞するの襟懷ある事也。

◎對校試合のために出陣する戰士にして短艇選手を兼ねたるものあり、先年七高遠征に際して短艇遠航のために出陣せしめずとて主張せし者あり、予に彼等が對部の愛情は賞すべきも、愛校の愛情とは予

盾して、其本末を誤れる非常纖漢たるを免れず、かゝる事實は毎年起るところのものにして、も少し眼
界の擴大を希望せざるを得ずある部にては短艇根性
といふ根性さへ遺傳せらるゝに至れり。

◎以上の成行きを有せる歴史により反目して大なるあるものを棄てゝも、猶よく目前の快に懂がれんと欲す。斯く學生に大切なるあるものを犠牲にして迄も選手を出して大會を爲すの理あらんや。吾人は今少し選手に多大の貴重なる時間其他を要せしめずして、快活なる雄々しき競漕を爲す事を得ば豈選手のみの利ならんや。而して短艇が一般的運動として樂しまるゝに至らば吾人の希望する處は實に此点にあり。

◎然れども後來遂に實現せらるゝとするも、種々の理由よりしてそは近き將來の事には非ざるべきのみ。而して、茲暫くは吾が國の柔道、劍道の如く一般的に行はる可きものに非ざるべし。吾人は英國青年が此の國技によりて偉大なる元氣を養成すと聞く毎に、吾が國、否、吾校の短艇の安ぞしかく我校友一般の活動のために用ゐられざる可きを悲むもの也。

あゝ短艇遂に吾が國民性に適せざる乎。

◎友あり語つて曰く、短艇部廢すべしと。其理由を問へば、余が前述の理論とほゞ一致せるを見る、而して特に、區々たる對部競漕のため一枚を省みず、且つ人類の最も重んずべき友情を之がために離反敵視せしむるに至るは愚の骨頂也、寧ろ短艇無きに如かず、と力説す。側にありし學友膝を進めて曰く、余も亦常に廢止の論を持す、只吾人之を語らざりしのみ、而して他にも敢へて直接關係なきため、論せざれども、吾曹と同感の士尠からざる可しと。吾人は此言を聞きて半面の理由とすべきものあるを認めずんばあらず。

◎年々支出する龍南會の短艇費の數百金を今少しく有効に使用する方法は無きか、又各部にて出す龍南會費以外の應援費の莫大なる、實に驚かすんば非ざる也。吾人は此費を以て吾人の満足に近き短艇に供する事能はずんば、寧ろ轉じて青年の元氣を養成獎勵するに足る他の門に轉ずる事を希望して止まず。而して年々埋まり行く繪津湖は川底を淺くし、彼の五人乗の小艇に差支へを生ずるに至りつゝあり

と云ふに於てをや。

◎加之、新調の三隻期年ならざるに前途使用にたゆる長からざるべしと云ふ。最大の負債をなして此効果少き運動具を不便なる遠隔の地に有す、効果多からしめんと欲するも得可らざる也。久しく問題となりし艇庫問題は再び吾が龍南會の負債として吾人の頭上に止らすんば止まざるべし。かくしてこゝ暫くは龍南會の會計は短艇問題のために苦めらるべく思つて茲に至れば同感の士敢て、さきの二友人のみにも非ざる可し。吾人は秃筆を走らせて大方の教示を乞ふもの也。あゝ短艇の存立奈何。(天行)

小 佛 嶺

小 補

披陀疊嶺碧淵群

決皆不看海岳雲

指點茫茫天低處、

飛鴻影沒夕陽曠、

Remember that you've got on your side the most wonderful things in the world-youth! There is nothing like youth. The middle-aged are mortgaged to life. The old are in life's lumber-room. But youth is the Lord of life. Youth has a kingdom waiting for it. Every one is from a king, and most people die in exile, like most kings.

Oscar Wilde : A women of no importance